

だんだん

ニュースレター

2014年3月
第12号



隠岐広域連合立 隠岐島前病院
<http://fish.miracle.ne.jp/dozen/>

はじめに

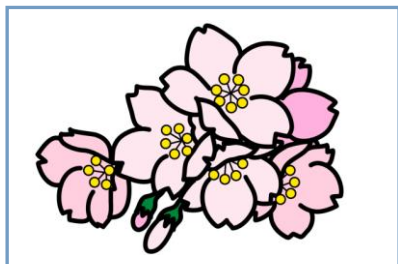
待ち遠しかった春が一気に登場したような毎日になりました。“だんだん”を、ご愛読の皆様いつもありがとうございます。隠岐島前病院が、皆様のご支援のもとに歩めていることに、心より感謝申し上げます。

このたびは、当院の白石院長が、第2回日本医師会赤ひげ大賞に選ばれましたことを、報告させていただきます。妻の裕子先生とともに、島の医療を担うこと16年が経過しました。離島医療には限界がある中、住民の皆様が、少しでも本土の人たちと変わらない医療を受けられるよう、医療者として常に前向きな努力を積み重ねておられます。

今では皆様にとって、安心の医療を感じられるようになったのでは・・・と思います。また、島を守りながら、離島医療・地域医療の魅力を全国に発信し、最近では、全国から多くの医学生、看護学生等が、隠岐島前病院を訪れるようになりました。白石院長、妻の裕子先生の、島の医療への貢献に、私も住民の一人として大変感謝しています。

また、看護部においては、H25年度の新たな取り組みとして、離島看護研修を企画し2名を受け入れました。この研修は離島看護に興味のある人に、1年間、島で働いて頂き、医療者として自分の成長に繋げるものです。この3月に1名の方に修了証をお渡しする事ができました。もう1名の方は2年間コースに進んで下さることになりました。

隠岐島前病院は若い人たちが集まり、若い人たちに支えられ、それぞれが成長しています。新年度を迎えるにあたり、白石院長、妻の裕子先生と、離島医療・地域医療に、想いのある現場スタッフと、4月から加わる新しいメンバーと全職員が一丸となって、今以上に住民の皆様にとって安心の医療提供が出来るよう「日本一の地域医療実践地」を目指し取り組んでまいりたいと思います。どうか皆様、変わらぬご支援を、これからも宜しくお願い申し上げます。



看護部長 松浦 幸子

★★★今回の内容★★★

- *はじめに
- *ひなまつり会
- *離島応援プログラム研修生第一号からのレポート
- *NPO 団体 JH 研修生からのご挨拶
- *酒井 Dr からのご挨拶
- *医療事務 横山さんからのご挨拶
- *おわりに



1、ひなまつり会

3月12日(水)に、毎年恒例のレクレーション企画であります「雛祭り会」を行いました。

例年ですと、シオン保育園の年長組の子供たちを招待し、可愛い歌や踊りを披露してもらっているのですが、今年は病院側の諸事情により招待ができませんでした…。ほんとにほんとーに残念です。

こちらの事情にも関わらず、保育園の先生と園児たちからプレゼントが…
手作りのお雛様をたくさんいただきました。

子供たち一人一人の個性が出ていて、とても可愛らしくて心がなごみます。

病棟食堂の窓ガラスに飾らせてもらいましたので、機会がありましたらご覧になって下さい。(期間限定です！)

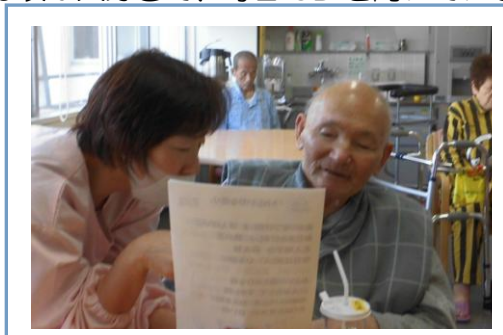
さて、可愛い園児たちの代わりに登場いたしましたのが、島前病院ナースのウクレレ部隊でございます！(部隊というほどの人数ではございませんが…)

休日・夜勤明け…そんなことは～なんのそのっ！！患者様のために出てきてくれました
(*^_^*)



ウクレレの演奏に合わせて、患者様と共に歌いました。

患者様の中には唄が大好きで、毎日CDを聞いている方も…



見事、大きな声で
しっかりと歌って
くださいました★

皆さん笑顔で、楽しいひと時を過ごしていただけたのではないかと思います。

歌のあとは、当院栄養士さん手作りの「桜餅」



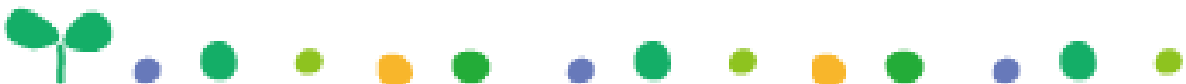
きっとこれが楽しみで、しっかり歌ってくれたのではないのでしょうか(笑)
楽しく歌い、美味しく頂き、笑顔がいっぱいの雛祭り会でした。



協力してくれたスタッフの皆さん、
素敵なプレゼントをくれたシオン
保育園の園児ならびに先生方、
本当にありがとうございました

次回のレクレーションは少し時間が空きますが、7月の七夕会になります。
また楽しい企画を考えようと思いますので、ご協力よろしくお願いします。

島前病院 看護助手 吉田





2. 離島応援プログラム 研修生第一号からのレポート

「1年の研修を通して学んだこと」

看護師 青柳みゆき

私が島前病院に来て訪問看護をし在宅での看取りを何人か関わってきました。在宅での看取りを通して、必要なことまた大事なことを考えてみました。

患者さんが家に帰りたいたいという気持ちや家族が家に連れて帰りたいたいという気持ちがあっても、いざ家に帰り24時間の介護は本当に大変で、私たち訪問看護もずっと家にいてあげることもできないため、家族の疲労は計り知れないものでした。亡くなった後に家族に会いに行くと、亡くなったさみしさがありつつも、「あれ以上介護が続いていたら本当に大変でした。私の方が倒れていました」という言葉を家族から聞くこともありました。

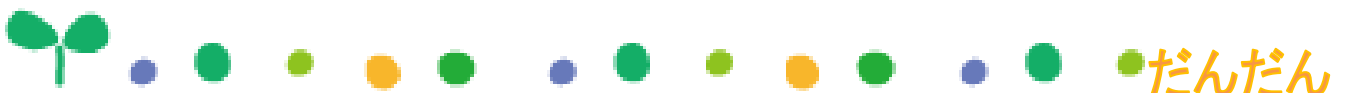
私たち看護師は、患者さんや家族の家で過ごしたいという気持ちが叶えられるよう家族の不安や介護をできるだけ和らげていくことが必要です。

しかし、家族の不安を和らげるといってもとても難しく、私になにができるのか。何をすればいいのかと思うことがありました。

デスカンファをした時に、薬剤師の嶋崎さんは「何もしなくてもただ居てあげればいいんじゃないの?」と言いました。「逆に看護師さんは何をしているの?」と聞かれました。嶋崎さんは訪問をすると何を話すわけでもなくただ患者さんや家族の人と居てあげるそうです。私はつい何かしてあげなきゃと思うので、家族の思いを聞き出そうと思いますが、あまり信頼関係のない中で話を聞き出すのは難しく、聞き出せないまま何もすることがなくなってしまおうと、家にいるのは何だかいつらくなり帰っていました。家族の本音が聞けるのはいつも亡くなった後だったように思います。

でも嶋崎さんの言葉を聞き、家族の人はただいてくれるだけで安心なんだなと知ることができました。それが寄り添うってことであり、寄り添うことで信頼関係もでき、家族が言えないことにも気づけたり、家族の介護の限界にも気づけるのかなと思いました。ただ居てあげることって本当に難しいことですが、とても大事なことを知ることができました。また、看取りの段階で本人や家族と関わるのではなく、外来受診で通院している時や入院している段階から関わることで、本人や家族と信頼関係が築きやすいのかなと思いました。

これからも島前病院で学んだことを生かせるよう、患者さんと近い距離で働けたらいいなと思います。





3. NPO団体ジャパンハート 国際医療長期研修生よりご挨拶

はじめまして。11月より、僻地・離島医療の研修生として、隠岐島前病院で勤務させていただきます。大阪生まれ大阪育ちの私ですが、幼いころから両親とともに、海・山・川など、たくさんの自然に触れさせてもらったお陰で、自然が大好きになりました。また、趣味でサーフィンをするため、気圧配置や風の向き、地形、うねりの方向などから波を予測するような、自然とともにあるスポーツを通して、自然の雄大さを実感するようになりました。そんな私が隠岐の島にこれたのも何かの縁でしょ！ってことで、病院の先輩にご指導頂き、海でワカメを採ったり、魚釣りにシーカヤックの体験、雄大な自然の中での観光、3月には島ランにも参加しました！



**目指せ！日本一の地域医療
隠岐島前病院
病院の理念を背中に背負い
走りました★ (●^o^●)**

島の方々はいつも、私に温かい言葉を掛けてくださり、気にかけてくださいます。島前病院の看護のモットーである、「気配り・目配り・心配り」は、この優しく温かい島ならではののだと感じました。自然と不便さは隣り合わせ。けれども、自然は人間が生きていく上での力を引き出してくれる。手付かずの自然に囲まれたこの島の医療に携わり、人のもつ力、生命の強さについて改めて考えることができました。

島前病院の一番の魅力は、なんといってもスタッフです。定年まで生き生き働くナースは都会にはそう多くいませんが、ここには笑顔の素敵なベテランナースがたくさんいます。そして、私たちが大先輩の看護観に触れ、学びを得られる、貴重な場所でもあります。

患者さんと一番長い時間を共にするのは私たち看護師であり、患者さんやご家族の一番近い存在にいること。どんなに忙しくても、できないことの言い訳にせず、常にスペシャルな看護を提供できるように努力すること。看護師になってから、常に自分の中で忘れないように留めています。患者さんやご家族に寄り添う看護がしたい。それを同じように掲げ、成長し続けるこの病院で、スタッフの一員として医療に携われたことを、心から嬉しく思います。院長はじめスタッフの皆さま、温かく受け入れて頂き、本当にありがとうございます。

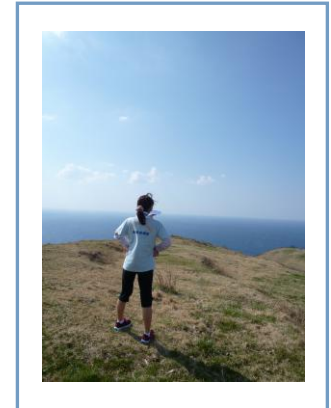
2011年3月、東日本大震災があり、災害支援ナースとして活動を続けました。文明の崩壊を目の当たりにし、劣悪な環境の中にも、人の優しさ、強さを感じました。病



院でなくても、検査機器や医療用具がなくても、私たち看護師はどんな環境だって看護ができます。看護学校で一番初めに習う言葉。看護の‘看’という字は、手と目から成り立つ。私たちナースは手と目を使って病気を看て、人を看る。災害看護の体験から、看護の基本に戻ることができ、看護の楽しさを再認識しました。これをきっかけに、国際医療に進むための新たな一步を踏み出した次第です。島前病院での研修も残り1カ月を切りました。この島の魅力、島前病院の医療の魅力をめいっぱい吸収し、異国の地で発揮できたらと思います。

看護師 西 美和

**目指せ！
日本一の地域医療
隠岐島前病院の
応援よろしくお願いします！！**



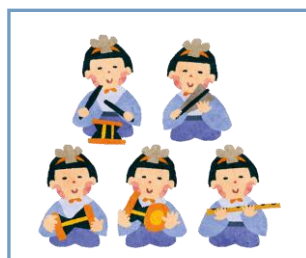
4. 酒井先生からのご挨拶

このたび平成26年3月いっぱい隠岐島前病院を離れることとなりました。平成24年の3月から6月まで知夫村診療所でつとめ、7月から約1年9か月のあいだ島前病院で務めさせていただきました。

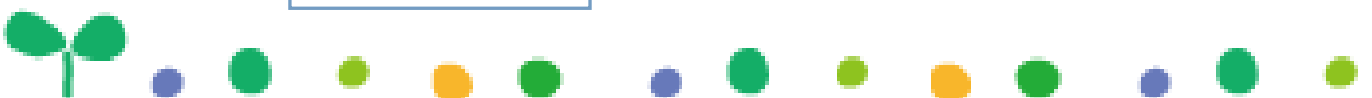
島前は離島という地理的に厳しい条件にあります。県全体でも医師や看護師の確保に困窮する中、島前病院には医師看護師があつまり、医療の安全と安心を提供してます。また、介護福祉との密な連携をとり高齢化が進む島全体を支えています。ちいさい島ながらに生活の様子もうかがえ、島民の生活と健康を支える島前病院のありように心打たれました。

若年ながら島前病院で勤務させていただき、この素晴らしい島前病院で多くのことを学ぶことができました。

4月からは出雲の県立中央病院で働きます。島前病院での学びや、釣りなどの楽しい思い出を今後の糧にし、医療に携わっていこうと思います。病院の皆様、島民の皆様本当にありがとうございました。



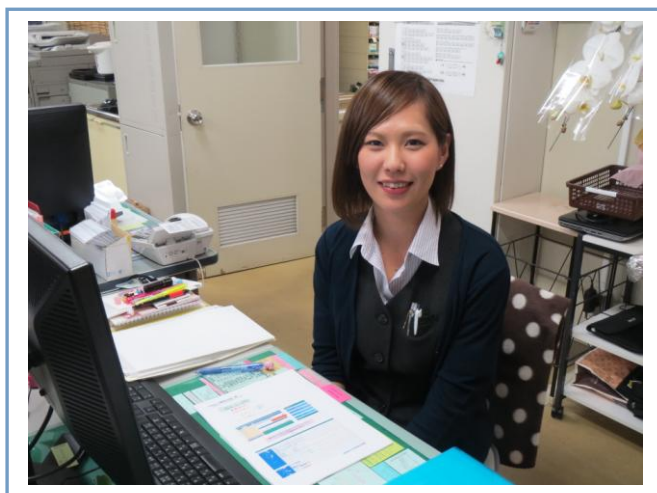
隠岐島前病院内科 酒井和久



5、医師事務作業補助者 横山 心さんより御挨拶

師事務作業補助者として、平成23年より働かせて頂いておりました横山と申します。この度、3月末で島前病院を退職することになりました。

島前病院に医師医務作業補助者が出来てから、初めて採用させて頂き右も左もわからず手探りの状態からのスタートで、毎日が勉強の日々でした。辛いこと、楽しいことなどありましたが、全て私を成長させて頂いた経験でした。時には皆様にご迷惑をおかけする事もあったかと思いますが、約3年間本当にお世話になりありがとうございました。また町で出会いましたら声をかけて頂けたらうれしく思います。



おわりに

いつも「だんだん」のご愛読、ありがとうございます。お陰様で院内広報誌「だんだん」も12号まで刊行することができました。

2013年度の締めくくりは、お世話になったスタッフの旅立ちもあり、ここを巣立っていく仲間から素敵なメッセージを頂きました。

新年度に入り、病院でもリハビリ部門の改築、新メンバーの参入など、新たな変化がありました。気分を新たに、スタッフ一丸となってよりより医療が提供できるよう邁進したいと思います。

地域に密着した病院であるために、患者様の声は私どもの励みになります。病院へのご要望など、何かお気付きの点があれば、お気軽に声を掛けてください。ではまた、次号のだんだんでお会いしましょう。

隠岐広域連合立 隠岐島前病院

〒648-0303

島根県隠岐郡西ノ島大字美田 2071-1

TEL 08514-7-8211

FAX 08514-7-8702

MAIL (看護部)

dz-kaigo@asahi.email.ne.jp

